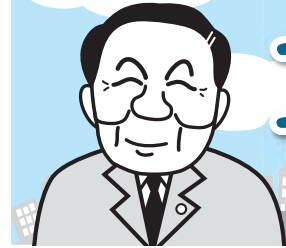


町長の一言



やおよろずの神

あけましておめでとう
ございます。

この原稿を書いている
ときはまだ12月ですが、
私は今年の元日も地元の
神社詣でをしようと思っ
ています。近ごろは、毎
年、地元神社の元旦祭に
出ていますが、以前はお
寺の元旦参りなどをした
こともあり、自分でも自
身の宗教、宗派のこだわ
りのいい加減さに気付い
ています。

しかし、考えてみる
と日本人大部分がこのよ
うな曖昧のなかにいるの
ではないかと思っていま
す。最近の結婚式は、教
会で牧師さんによる挙式
が多くなっています。そ
れとてキリスト教を信

仰しているようにも思え
ません。外国では、宗教
の違いによる戦争も珍し
くありませんし、宗教宗
派を峻別し過ぎているの
ではないかと思うほどで
す。

私たちの周囲を見て
も、山の神を祭り、酒
を飲み、藁奉殿のお稲荷
様を作る、また氏神様を
拝むというようなたくさ
んの神様が日常生活の中
に溶け込んでいます。い
わゆる「やおよろずの神」

(八百万の神)が土着して
いるのだと思います。町
民の皆さんにとって、新
しい年がたくさんの神々
に守られ、良い年であり
ます事を心から願ってお
ります。

この内容は、町ホームページの「町長の部屋」の中でも掲載しています。ぜひご覧ください。

文芸しるさと

俳句

立冬やいつかライカを手にする日
一 木 雄一郎
日記買ふ少し迷ひて地味な色
飯 田 勇一
吹かれつつ輝き昇る遊系かな
山 崎 正行
情熱を内に秘めたり万年青の実
今 瀬 多代美
引き抜いてははめく葱の白さかな
鯉 淵 寿美恵
大入り日オレンジ色の冬に入る
田 所 厚子
枯芒太平洋へ土手長し
飯 村 愛子
アルバムと甘きコーヒー置炬燵
いそべ きよ
綿飴のごとふっくらと冬の雲
高 橋 芦江
校庭のぶらんこ揺らし空っ風
阿久津 あい子
千柿の飴色夕日はね返す
飯 村 昭子
柿落葉友と二人の昼休み
仲 田 こう
白手ぬぐひ林檎並べて傷つかず
竹 内 幸子
朴落葉かすかに動き猫の耳
和 田 範子
どっしりと石の山門石路の花
仲 田 まちる
煌煌とかがやき強き冬の星
瀬 谷 博子
年の瀬にめぐり来りし賀状書く
岩 下 美知野

短歌

大空に浮かぶ気球の数如何
岩 下 通子
佛顔と書かれた顔の優さ面て
市 川 義子
倒れても尚咲き乱るコスモ
スのか弱げなれど根本逞し
佐 川 あや
「湯かげんは如何ですか」と聞き
し日も香くしてみ親の壮の顔顯つ
杉 山 みちこ
八十歳を越ゆれど嶽とる喜び
を与えて呉るる命育む
宮 本 ふみ江
降り止まぬ秋雨一夜を音に醒め
征きて還らざりし兄を思ひをり
所 美恵子
つれあひの愛に包まれ来し義妹
の一生なりしよ幸福なるべし
山 形 式 妙
刈り入れの終えたる緑ひろご
りて白鷺の二羽優雅に佇てり
藤 原 千代
一歳の曾孫は言葉解せずもわ
がもの言えば体ごと笑ふ
青 柳 京子
バックミラーに遠ざかりゆくふる
里の夕焼空と老いたる母と
渡 辺 千紗子
泣き叫ぶ子は麻酔なき手術なり
。生スタノの被害に世界は支援せよ
秋 山 愛子
涼やかに虫の声ありて夕暮る
る重ねたる歳の過ぎゆくひと日
大 森 久子
薄き紙を折る音に似る秋の雨
微かにわれの心を包む
高 堀 よしの

川柳

みちたりて季即忘るるわが生活
温室果実こたつて食む
山 口 崇
碧空に真赤に実るピラカンサ
小鳥唄いてついでみおりぬ
阿良山 ウメノ
山の端を離るる大満月を息
呑みつつ見つむ那珂の河原に
薄 井 ひろ
蚕を育てまゆ成らしめし香き
日が甦りくる郷土資料館
枝 不美
母には似ぬ一生と思ひ母に似た
る運命と思ひつまた冬を迎ふ
片 見 和 枝
渓谷の木々の紅葉は霧にぬれ
陽に煌きて虹を散らせり
川 上 千代子
白銀の波寄するるときすすき野
の峠越れば里の見え来たり
島 愛子
大型店の眩きあかりに眼を細
む節電なんてどこ吹く風よ
多 田 志保子
ちぎれ雲流れ流れてどこへ行く
消えては浮かび浮かびては消ゆ
坪 井 きよ子
小豆胡麻芋幹甘藷柚子生姜老
い姉からの便届き来ぬ
萩 谷 登喜子
滞在の仕事終えて去った部屋荷
物無し笑顔で送った思い出魅る
和 知 美智子
子等と行く旅が嬉しと言ひ母
と一行五人吾妻嶺を越ゆ
富 田 佐智子
新品の顔で出てくる初日の出
山 本 隆 莊